

から農村部＝ウレゥバランへ移行し，スルタンの廃立はウレゥバラン達の意見が左右するようになった．討論において次のような問題点が指摘された．(1)他の小港市国家からの貿易権奪取において，軍勢力のみではなく，宗教的・呪術的な要素はみられなかったか (2)貿易発展において，コショウ栽培の状況はどうであったか (3)水田耕作の発展において米の輸出入の状況はどうであったか (4)国内の諸階層において，特に外国人，奴隷はいかなる地位にあったか，また奴隷は略奪または貿易によって得られたのか．これらの問題点は発表者の力不足のゆえに十分な説明をなしえなかったものであり今後の研究の指針として受入れさせていただくことにしたい．

「農業国家」による「都市国家」の包摂＝コンバウン・ビルマ＝

大野 徹

表題の「農業国家」による「都市国家」の包摂とは，具体的には1752年から57年までの5年間にわたって行われた「ビルマ族」による「モン族」の軍事的征服を意味するが，その場合，上ビルマ＝農業国家，下ビルマ＝都市国家という前提が必要になる．ビルマ族の居住地である「上ビルマ」は，(1)内陸に位置し (2)専ら農耕によって成り立ち (3)王権が灌漑，治水に積極的に関与しこれを維持する事によって住民社会を支配していたという事実からこれを「農業国家」と規定し，モン族の伝統的地盤である「下ビルマ」は，(1)河川または海岸に位置し (2)諸外国との間に交易を行ない (3)ペグー，マルタバン，バセインという三大港市を中心に構成されていたという特徴からこれを「都市国家」と規定する事ができると思う．上・下ビルマを対比して考えた場合，単に居住民族の違いだけでなく気候風土の著しい差異が注目される．上ビルマは年間降雨量が千ミリ未満の少雨地帯だが，下ビルマは2500ミリから5千ミリの多雨地帯である．前者は畑作，後者は水田耕作を特徴とする．後者では天水栽培が可能だが，前者では灌漑が不可欠である．ところが17世紀後半から18世紀前半にかけてのビルマでは，シャム軍の侵略，清軍の侵攻，マニプール軍の襲撃など東，西，北三方からの相次ぐ外患に加え，歴代国王の非生産的なアユタヤ遠征に起因する人口の減少，農地の荒廃による国力の疲弊を見せた．その上1742年には全国的な饑饉が発生し，モン族の蜂起をもたらす．コンバウン朝ビルマはこのモン族の軍事的征服の築かれたものだが，それはビルマ軍の質・量両面における武器の優越性，兵力の継続的増強，外国勢力との軍事的繋がり，河川運航技術の習得に伴う機動性の発揮などを挺として成立したものであった．質疑(1)上・下ビルマの農業形態の変化は両者のStatecraftの違いにあったのではないか(桜井氏)．(2)ポルトガル資料によれば，マルタバンは諸外国と交易を行っていたが，政治的・経済的にはペグーの支配下におかれていた．(生田氏)